

琉球大学学術リポジトリ

「ダバオ国」の沖縄人社会再考 — 本土日本人、フィリピン人との関係を中心に —

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学移民研究センター 公開日: 2018-11-13 キーワード (Ja): 沖縄人の越境ネットワーク, 複合社会, オトロ・ハボン, 内婚志向, 「非日本人」の琉球人難民 キーワード (En): Okinawan transnational network, Plural Society, Otro Hapon, In-marriage orientation, Non-Japanese Ryukyuan refugees 作成者: 大野, 俊, Ohno, Shun メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002010164

「ダバオ国」の沖縄人社会再考 —本土日本人，フィリピン人との関係を中心に—

大野 俊

- I. はじめに
- II. 肥大化する沖縄移民社会
- III. 村単位の越境ネットワーク
- IV. 「複合社会」のなかのオトロ・ハボン
- V. 沖縄人の婚姻行動
- VI. 「ダバオ国」崩壊過程における沖縄人
- VII. むすび

キーワード：沖縄人の越境ネットワーク，複合社会，オトロ・ハボン，内婚志向，「非日本人」の琉球人難民

I. はじめに

ミンダナオ島南東部のダバオ市は、フィリピンでマニラ首都圏に次いで人口の多い百万人都市である。アジア太平洋戦争前、同市周辺には東南アジア最大の邦人社会が形成されていた。その多くはマニラ麻（アバカ）栽培に従事する農業移民で、およそ半数は沖縄県出身者だった。船舶ロープの材料になるマニラ麻の価格が高騰した1920年代半ばからはダバオ行きの移民が急増し、開戦前、邦人社会は2万人近くに膨らんだ。その膨張は日本の中国大陸への軍事的進出がエスカレートする時期と重なり、地元のメディアは「満州国」になぞらえて「ダバオ国」と形容するほどだった。

このダバオの邦人社会については、東南アジアで異例に大きな規模だったこともあって研究者の関心の的になり、1950年代後半ごろから近年にいたるまで国内外で相当数の論文や著作が発表されている（例えば、Quiason 1958; Cody 1958; Cody 1959; Goodman 1963; Goodman 1965; Saniel 1966; Goodman 1967; 橋谷 1985; Furiya 1993; 早瀬 1996; Yu-Jose 1996; 今野・藤崎 1996: 43-164; Yu-Jose 1997; Capili 1997; Abinales 1997, Kaneshiro 2002）。しかし、これらの研究は、Kaneshiroなどを除けば、邦人移民社会を単一のエスニック集団であるとの前提で議論し、日本本土出身者（以後、「本土日本人」と表記）と沖縄県出身者（以後、「沖縄人」と表記）の関係や両者の間にあったサブエスニックな溝についてほとんど触れていない。また、地元フィリピン人と沖縄人との関係や交流が、本土日本人のものとは微妙に異なっていたことも言及されていない。本稿では、戦前・戦中期にダバオで暮らした沖縄一世や現地生まれの沖縄二世、ダバオの現地住民へのインタビューをまじえ、ダバオ在留邦人社会における沖縄移民の位置づけ、沖縄人、本土日本人、フィリピン人の3者間の婚姻を含む関係と相互認識、そして戦時下で沖縄人移民社会が崩壊していく過程などについても実証的に明らかにしたい。

II. 肥大化する沖縄移民社会

ダバオに定住する最初の邦人移民のコア集団は、いわゆる「ベンゲット移民」である。ベンゲット移民とは、バギオというルソン島中部の高原の避暑地（夏の首都）に通じる「ベンゲット道路」工事のために導入された日本人建設労働者のことで、1903年から道路が完成する1905年初めまでの間、一説には延べ約2,800人が工事に従事した（東亜経済調査局 1936：212）。この中心は、沖縄人と九州人だった（米田 1939：31）。沖縄からのベンゲット移民は、本土日本人移民より1年遅れの1904年4月に現地入りした。『琉球史料』によると、この年、計360人の沖縄人がベンゲット移民としてルソン島に渡航した（金武町史編さん委員会 1996a：265）。

ここで重要な役割を果たしたのが、沖縄で「海外移民の父」と言われる當山久三と「フィリピン開拓の父」と言われる大城孝蔵である。二人とも沖縄本島の国頭郡金武村（いまの金武町）出身で、大城が金武尋常小学校児童のころ、當山は同校の教師だった¹⁾。以来、親交が続き、當山が移民取扱会社の業務代理人になって沖縄人のフィリピン移住事業を始めると、大城はベンゲットへの先遣人になり、300人以上の沖縄人労働者の「監督」として工事現場に赴任した（金武町史編さん委員会 1996a：562）。ベンゲット道路は1905年1月に完工しているから、沖縄人移民は9カ月間しか工事に従事しなかったことになる。未開の山間地での労働環境、居住環境は極めて劣悪で、赤痢、コレラなどの病気がもとで、700人あるいはそれ以上の日本人労働者が命を落とした、と戦前の数多くの出版物に記されている（例えば、蒲原 1938：29；古屋 1940：11）²⁾。この犠牲者の中には、沖縄人も相当数いたとみられる。

道路完成とともに、ベンゲット移民の多くは日本に帰国したが、百人単位の労働者がそのままフィリピンに居残った。その主な理由は、帰国したくてもそれだけの所持金がなかったからのようなのだ。労働者たちの日本への送金を約束した日本人業者に稼いだカネをかすめ取られた労働者もいた、というベンゲット移民の証言がある（米田 1939：34）。職にあぶれ、蓄えもないベンゲット移民の有力な転進先がダバオだった。

ダバオは当時、米国の退役軍人が中心になってのマニラ麻栽培が盛んになりつつある時期だった。これに目をつけたのが、兵庫県出身でマニラに居住の商人、太田恭三郎だった。太田は1904年9月にベンゲット移民をはじめとする邦人男性180人をダバオに派遣し、以後、邦人のダバオ移住は本格化していく（蒲原 1938：36-39, 59）。太田と知己を得た大城は1905年1月、第2陣の邦人移民100人を率いてダバオに渡った。この多数が沖縄人だったとみられる（金武町史編さん委員会 1996a：564）。

一方、ベンゲット道路の開通に伴って、バギオも「夏の首都」として国内移民を引きつけ、繁栄への道をたどり始める。このため、ベンゲット移民の中には、工事終了後も現地に居残り、先住民族のイゴロット族などの女性を伴侶として農業や建設業などに従事した者が少なくなかった。バギオ周辺には最盛期、千人余りの日本人が居住していた。このうち沖縄出身者は極めて少数だったようである³⁾。バギオ市には現在、二世と三世を中心とする日系人団体「北ルソン比日友好協会」があるが、戦前の沖縄移民を祖先に持つ日系人の会員はいない⁴⁾。フィリピンに残った沖縄人ベンゲット移民の大半はダバオに渡ったと考えられる。

ダバオは土壌が肥えているうえ、台風に襲われることもめったにないことなどから、マニラ麻栽培の最適地だった。マニラ麻は当時、船舶用ロープの材料として欧米、日本などで重宝さ

れ、世界のどこかで戦争が起きると、需要量も値段もはね上がる戦略商品だった。自らもダバオに入植した太田恭三郎は1907年に現地法人の太田興業を設立し、本格的なマニラ麻栽培を開始する。彼の右腕になったのが大城孝蔵である。太田興業はダバオのバゴとミンタルという両地区に1,015ヘクタールの土地を購入したが、バゴ地区の開拓は大城に任された。大城は広大な未開地を一面の麻山にする事業に成功し、太田の期待に応えた。この土地は今も、大城の姓名をとった「バゴ・オシロ (Bago Oshiro)」という地名がつけられている。大城は1910年ごろ、ダバオの中核企業に成長しつつあった太田興業の2代目副社長に抜擢される。そのうえ、太田は実兄の長女をダバオに連れてきて大城にめとらせた（同：567-568；古川 1956：123）。後述のように、本土日本人の沖縄人への偏見や差別感が極めて強かった当時としては、これは異例の結婚である。太田の並々ならぬ大城に対する信頼の厚さをうかがわせる。

その後も大城のイニシアチブでバゴ地区は開発が進んだ。大城は同郷の男性たちにダバオへの移住を奨励し、労働力を確保した。1917年時点ではこの地区に166人の「自営者」がいたが、うち112人が沖縄人だった（伊藤 1917：107-112）。太田が発案したといわれる「自営者制度」（請負耕作制度）は、地主や企業が外部の耕作者に麻園の経営を請け負わせ、産出麻の5%（のちに10%-15%にアップ）の地代を差し引いたうえで地主や企業が引き取る制度のことで、地元住民は「パキアオ・システム」（契約労働制）と呼んだ。この制度は資金力のない沖縄移民らの労働・雇用形態にはうまく適合し、「自営者」という名の土地なし入植者のやる気を引き出した。

ダバオには、古川拓殖、松岡拓殖など邦人が経営するマニラ麻栽培の現地法人が次々に設立され、最盛期には70を超える日系資本の麻栽培会社があった。この中では、日本の有力商社とつながりを持って資金力のある太田興業と古川拓殖が、ダバオ麻産業で指導的地位を占める2大企業だった⁵⁾。太田はパイオニアとしての功績から「ダバオ開拓の父」という評価を現地の在留邦人社会のみならず日本国内でも確立した⁶⁾。太田が1917年に早世してからは、大城が太田興業の実権者となり、大量に麻挽きができる動力機械「ハゴタン」の開発や実用化にあたって大きな貢献をした（古川 1956：137-138）。このため、大城はダバオ邦人社会の中で太田に続くカリスマ的存在になり、1916年に組織された「ダバオ沖縄県人会」の初代会長のほか、その2年後に創立された「ダバオ日本人会」（創立時、会員2,500人余り）でも初代会長を務めた。大城は日本人会の会長時代、ダバオの中心街に日本人病院を設けるなど、まだ日本領事館もなかったころのダバオで邦人移民の相互扶助や民生向上に尽くした（蒲原 1938：507-508）。

「大城の成功に続け」とばかりに、沖縄人は続々とダバオに渡った。在ダバオ日本領事館の調べでは、1920年に1,260人（在留邦人全体の21.6%）だった沖縄人は、1936年には6,755人（同48.5%）に急増した（蒲原 1938：744-753）。ダバオ在留邦人社会の中で、沖縄人と日本本土人の人口割合は1920年代後期から1945年のアジア太平洋戦争終結時までほぼ半々、年によっては沖縄人の方が多い状況だった。ダバオ在留邦人社会における沖縄人の割合が1920年代に急上昇したのはにはわけがある。マニラ麻は価格変動が大きい作物で、1920年から23年にかけての第1次不況期にはその前の好況期の2分の1から3分の1まで価格が暴落していた。この時期、本土日本人の多くがダバオでの生活に見切りをつけて帰国したり、フィリピンの他地域に移住した。しかし、沖縄人はこの時期もダバオにとどまった。「ダバオの不況期は沖縄の最好況期よ

りもはるかに良い」というのが、沖縄移民の一般認識だったからだ。古川拓殖社長の古川義三(1956:367)は著書の中で「ダバオの不況時代に、[本土日本人は]何の因果でかかる所に来たのか、運が悪かったと気を腐らしたが、沖縄県人は蛇味線を弾き、好きな豚肉を味い、平気で暮して大きな勢力をなした」(□内は筆者挿入)と記している。

III. 村単位の越境ネットワーク

ダバオにおける沖縄移民の出身地は、沖縄本島が圧倒的に多く、それも本島中部から南部にかけての地域が中心だった。中でも目立ったのが「沖縄移民発祥の地」といわれる金武村である。同村における1903年から41年にかけての渡航地域別旅券下付数をみると、フィリピンが延べ1,597人(全下付数の49・5%)で、ハワイ(1,265人)をも上まわって最も多い(金武町史編さん委員会 1996a:22-24)。金武町では、戦前・戦中期にダバオで暮らしたことのある移民一世が今も何人か健在である。このうち、宜野座仙五郎(1921年生まれ)は1938年7月にダバオに渡った。その動機や現地での暮らしは以下のようなものだった。

当時、村ではみんなが[ダバオに]行きよるから、わしも出稼ぎで渡った。向こうでもうけて帰ってきた人は、瓦屋根の大きな家を建てよった。その前に父はハワイに出稼ぎに行き、長男と次男を呼び寄せた。しかし、わしが大きくなったころは、ハワイは移民制限でもう行けなかった。ダバオには先に姉夫婦が行って、上マテナ地区でビサヤ族の地主から14,000坪くらいの土地を借りて麻山を経営していた。わしは呼び寄せで現地に行って、姉の一家と同居した。そこで麻山の草取りや麻の皮むきに使われた。日当は良かったよ。金武の高等小学校を卒業して村役場で給仕として働いていたころは日当が35銭にしかならなかった。ダバオでは、それが1円10銭くらいになった。食生活も良かった。金武にいたころはサツマイモ食で、メシ(米飯)は1日に1回しか食べれなかった。むこうでは、1日に3度、米が食べることができた。それでも、永住の気持ちはなかった。渡航前に父親からも「必ず元気に帰ってこい」と言われていたから⁷⁾。(□内は筆者挿入)

宜野座と同じ^{あざ}字金武に住む池原金英(1920年生まれ)は、宜野座より半年遅れてダバオに入植した。

わしらの年代の友人はみんな20歳になるまでには[ダバオに]行ってしまった。わしは寂しくて、どんな所かと、遊び半分で行くことを決めた。うちは茅葺きだったが、瓦葺きの家が欲しかった。フィリピンを選んだのは、ハワイはもう日本人移民排斥で行けなくなっていたし、南米は行けても遠くて旅費が高かったから。それに、ハワイでは一生、監督されて労働させられるが、フィリピンでは「10年働いたら、麻山栽培の親方になれる」と聞かされていた。先にダバオのカリナン地区に入植して麻山を経営していた遠い親戚に呼び寄せをお願いした。その地主はイロカノで、わし以外の労働者8人はビサヤンだった。麻山の仕事はきつかった。麻の繊維をナイフを使ってはぎとる仕事で、まだ暗がりの午前4時に起きて、1日に12時間も働いた。最初は〈何で来たかな〉と思ったものだが、5カ月もすれば、体が慣れてきた。月給は15ペソ[当時のレートで30円余り]だったと思う⁸⁾。(□内は筆者挿入)

宜野座と池原の話は共通点が多い。成人前の男子たちが金武村での貧しい暮らしから抜け出

すため先を競うようにダバオに渡航する中で、この2人も「周りに遅れをとるまい」とダバオ行きを決意。そして、先に移住していた親族を頼って移住し、親族が営むマニラ麻農園で住み込み労働者として毎日、長時間働いた。地主は、北方の島からやって来たビサヤン（ビサヤ人）やイロカノといったキリスト教徒フィリピン人で、沖縄人は「自営者」といっても耕作請負の小作農だった。それでも、沖縄での仕事よりはるかに高収入が得られることから、若い入植者たちの目標になった。稼いだ金はできるだけ蓄え、家族にも送金した。しかし、あくまで出稼ぎが目的で、ダバオに永住の意思は弱く、故郷へ錦を飾る日が来るのをひたすら夢見ていた。

戦前、沖縄の主要産業だった黒砂糖は1920年に国際価格が暴落し、沖縄経済は30年代にいたるまで「ソテツ地獄」と言われるほどの窮乏化にあえいだ。そうした中で、沖縄から県外への労働力流出が急増した（富山 1990：39,76-82）。金武村も例外ではなかったが、當山、大城らハワイやフィリピンへの移住事業に熱意をかけ、また成功して帰る同郷者が多かったことから、県外移住の多くは海外移住になった。

フィリピン移住の動機として、生活改善以外にもうひとつ重要なのは、徴兵忌避である。1934年に金武村からダバオに渡った當山謙正は「徴兵検査が延期できる」ことを、自身の移住の大きな動機として挙げている（金武町史編さん委員会 1996b: 250）。池原金英も筆者のインタビューで「わしの友人の中には、長男、次男が兵隊に採られ、三男まで採られると、跡継ぎがいなくなるので、兵役逃れでダバオに行った者もいる」と述べている。当時の兵役法は、外国居住者は本人の願い出によって満37歳まで徴集延期が可能で、それをすぎると徴兵を免除されていた（大宜味 1935：273）。このため、ダバオ日本人会の主要業務の一つが徴兵猶予願いの取り扱いだった。同会には1938年だけで1,119件も猶予願いが出されている（大谷編 1939：534-535）。徴兵忌避も目的にダバオに移住した邦人男性が沖縄人はじめ相当数いたことをうかがわせる。

ダバオには移民たちの出身県ごとに県人団体が組織されたが、ダバオ沖縄県人会はその規模が突出して大きかった。同会会員は1939年段階で約3,000人もいた（同：544）。そして、県人会の中で唯一、常設の事務所を設け、諸手続き、通訳などの面で沖縄移民の便宜を図った。また、ダバオ日本人会にも常時、役員を送り込んでいた。南ミンダナオ興業社長の赤峯三郎、上原旅館経営の上原仁太郎らは日本人会の副会長を務めた経歴がある（同：544；蒲原 1938：1435-1436, 1498-99）。古川拓殖社長の古川義三（1956：383-388）によれば、沖縄県人会は、在ダバオ日本領事館、太田興業、古川拓殖、自営者更生会と並ぶ「ダバオの5大勢力」の一つだった。その影響力は、地元発行の邦字紙「日比新聞」主筆、蒲原廣二（1938：763-764）をして、「一挙手一投足は全居留民の上に反映する」と言わしめるほどだった。

沖縄移民は県人会のほか、村人会や^{あざ}字会も組織した。どちらの会でも、若者が集まれば、沖縄相撲大会を催し、毎年、盛会だった（金武区誌編集委員会 1994：111）。移住にあたって^{あざ}字のネットワークが機能したことは、1903年から41年にかけて旅券を取得した^{あざ}字金武の出身者が延べ2,320人と、金武村全体の71・9%を占めたことからもうかがえる（金武町史編さん委員会 1996a：24-26）。

1927年段階でダバオ州在住の沖縄人は4,381人を数えたが、うち金武村の出身は658人と最も多かった。この年、他には小禄村出身（455人）、豊見城村出身（305人）などが多かった。小禄

村出身では前述の赤峯三郎，豊見城村出身では前述の上原仁太郎のほか，赤嶺兄弟会社経営の赤嶺兄弟（亀次郎，加那，徳三，亀次）らの成功者が出ている（村山 1928；金武町史編さん委員会 1996a: 288, 300）。同じ村や字の出身者との地縁や沖繩独特の門中（共通の始祖を持ち，父系血縁によって結びつく集団）など血縁をベースとする濃密な人的ネットワークを活かして越境した沖繩人が多かった実情をうかがわせる。

IV. 「複合社会」のなかのオトロ・ハポン

日本人が入植して間もないころのダバオは，オランダ領東インド（いまのインドネシア）社会を研究したJ.S. ファーニバルがいうところの「複合社会」（plural society），またはそれに近いものだったと考えられる。複合社会とは，二つあるいはそれ以上の要素あるいは社会秩序が一つの政治単位下で混和することなく共存する状態の社会である（Furnivall 1939：446）。1937年に中央政府が管轄の特別市に制定されたダバオ市を例にとると，同年7月時点で，同市には日本人は11,487人が居住していた。これは当時のダバオ市人口の約4分の1にあたる。それ以外は，ビサヤン，イロカノらのキリスト教徒フィリピン人が26,731人，非キリスト教徒フィリピン人が6,209人，日本人以外の外国人は中国人を中心に1,152人（柴田 1942a：302-304）。非キリスト教徒フィリピン人はバゴボ族，アタ族，モロ族らの先住民だった。

当時のフィリピンは，国民統合に苦しむ現在以上の「想像の共同体」（Anderson 1983）だった。16世紀後半からスペイン，20世紀初頭からは米国の植民支配下に置かれたフィリピン諸島は1935年にコモンウェルス（独立準備政府）に移行し，米国からの完全独立にいたる過程にあった。公用語は英語とスペイン語で，ルソン島中南部と周辺諸島の言語であるタガログ語が「国語」に指定されたのは1937年になってからである。このため，1939年の国勢調査によると，ダバオ州全市民（29万2,600人）のうちタガログ語がしゃべれたのは全体の12%弱の3万4,600人にすぎなかった。教育言語の英語にしても，全体の2割にあたる6万人余りしかしゃべれなかった（The Philippines, Commission of the Census, 1940: vol. I, part II, 7）。大半の市民は，出自民族集団の言語であるバゴボ語，アタ語，ビサヤ語などを日常会話として用いていた。特に，公教育をほとんど受けたことのなかった先住民たちの間では「フィリピン国民」という意識は希薄で，それぞれの民族集団の中で生活の大部分が営まれていた。

多民族・多言語の中で生きる地元住民からみれば，在留邦人社会は2種類のエスニック集団で構成されると理解された。本土日本人と沖繩人である。この点については，Cecil Cody (1959) がダバオで年配の住民からの聞き取りなどをもとに書いた論文の中で指摘している。1950年代末から60年代半ばにかけてフィリピン人学者による戦前期ダバオの日本人についての研究論文が他にも発表されているが（Quiason 1958；Cody 1958；Saniel 1966），沖繩人移民と本土日本人移民の差異への言及はほとんどない。その点において，Codyの論文は光る。彼女は，ダバオの在留邦人を「非沖繩人」（本土日本人のこと）と「沖繩人」に分け，非沖繩人は知的職業人，会社幹部，事務職，技術者が多かったのに対して，沖繩人は「より頑丈な体格で，ひげや体毛が濃く，勇敢，機知に富み，優秀な労働者」「無教育で，言葉も行動も粗野」という傾向があったという。そして，本土日本人は，自分たちが沖繩人より優越だと考え，キリスト教徒のフィリピン人が非キリスト教徒の先住民を差別したのと同じように沖繩人を差別した，と指

摘している (Cody 1959 : 174)。

このような沖縄人に対するステレオタイプな見方がダバオの住民の間にあったことは、筆者の住民や移民体験者へのインタビューからも確認できた。例えば、子供時代に沖縄人移民と接したバゴボ男性、サントス・イダル (Santos Idal, 1933年生まれ) の沖縄人観は、以下のようなものである。

沖縄人は、日本人とは違った独特の習慣を持っていた。彼らは、マタパン (matapang=勇敢) で、マスンギット (masungit=気難しい) のように見えた。だから、私たちバゴボ族は彼らを恐れ、子供たちは近づくのを避けていた。日本人は友好的で、ときどき地元の子供たちにビスケットなどをくれた。しかし、私たちは沖縄人には何もくれと頼まなかった⁹⁾。

イダルの語る「日本人」とは本土日本人のことだが、沖縄人を「日本人」の範疇に含まないことを前提に話をしている点が興味深い。

岡山県出身の父親とバゴボ族の母親を持つ日系二世の松尾啓助 (1926年生まれ) は、地元のバゴボ社会で、ミンダナオ島の別の先住民族、マティグサログ (Matigsalog) 族に沖縄人を例える言い方をしているのを耳にしたことがあるという¹⁰⁾。マティグサログ族は肌がひときわ黒く、縮れ毛、普段は裸体に近い民族集団で、マニラ麻などを素材にしたカラフルで凝った民族衣装をまとうバゴボ族は、自分たちよりも原始的なグループとみなす傾向があった。バゴボ族は、沖縄人が犬肉や水牛肉など本土日本人が普段、口にしないものも食べることなどから、「より非文明的」との印象を抱いていたようだ。

同様の証言は、本土日本人移民の間からも聞かれる。例えば、1933年にダバオに渡った長崎県出身の水口博幸 (1921年生まれ) は、地元のフィリピン人が別のフィリピン人を見下して言うときに「イカウ、オキナワ・カ」(おまえは沖縄人か) という現地語を使っていたのを記憶している。「沖縄の人は、フィリピン人にもバカにされていた」というのが、水口の見方である¹¹⁾。

フィリピン人たちは、沖縄人のことを、平均的にやや低い身長、体毛の濃さ、食事の嗜好 (豚肉好きなど) などの面から本土日本人と見分けができた。フィリピン政府も、日常言語で沖縄人と本土日本人と区別していた。統計局が1939年に実施の国勢調査では、ダバオ州で「Japanese」(日本語) と「Okinawa」(沖縄語) を話す住民の人口を計1万8,440人と報告している (The Philippines, Commission of the Census 1940:vol. I ,part II ,12)。こうした外見、言葉、生活習慣などの違いを認識した地元フィリピン人は、沖縄移民を日本本土移民とは区別し、地元のチャバカノ語で「オトロ・ハポン (Otro Hapon)」, すなわち「別の日本人」と呼んだ。この言葉は、沖縄移民二世の子供たちに対しても純血、混血を問わずに使われた¹²⁾。戦前のハワイでは「ジャパン・パケ (Japan pake)」(日本・中国人), ミクロネシアでは「ジャパン・カナカ (Japan kanaka)」(日本・カナカ人) という沖縄人に対する蔑称が、それぞれの地元住民の間で使われていたことが報告されている (例えば、富山 1993 : 59-63 ; Arakaki 2002 : 131-132)。「オトロ・ハポン」にも似たようなニュアンスが込められて使われていたとみられる¹³⁾。

当時、本土日本人は一般的に沖縄人に対して根強い差別意識や偏見を抱く傾向があった¹⁴⁾。この差別構造は海外の邦人移民社会でも温存され、沖縄人は「二級の日本人」とみなされがち

だった¹⁵⁾。例えば、戦前のブラジル在留邦人社会では、送り込まれた農園から多数の沖縄人が逃走したことなどを理由に「劣等移民」視され、1910年代から20年代にかけて2度にわたり移住禁止措置がとられたことがある（村井 1979：26-47）。Codyは、ダバオでも本土日本人による沖縄人差別が存在したことを指摘したが、その具体例は挙げていない。筆者が沖縄移民一世や地元住民から聞き取った範囲では、ブラジルで起きたような露骨な沖縄人排除や、戦前の南洋群島にあったとされる本土日本人との間の体系的賃金格差（富山 1993：57）はダバオにはなかった。

しかし、本土日本人の沖縄人に対する差別意識がなかったわけではない。例えば、1920年代後半、日本の副領事が外務省に宛てた報告書が沖縄人への偏見や蔑視を含んでいたことが沖縄人社会で問題になったことがある。この報告書の中で副領事は、熱帯気候にもすぐに順応する勤勉な労働者として沖縄人を称えつつも、他県人への非協力、無学、拝金主義などの「欠点」も指摘していた。この報告書が表ざたになると、ダバオ沖縄県人会は、これらの指摘について「事実無根」として逐一反論し、誤認を正した（村山 1928：15-22；Yu-Jose 1999：91-93）。

これより先、ダバオでは沖縄移民の不法入国事件があった。1918年1月、台湾の基隆港から日本の帆船で沖縄人55人がダバオに密航した事件で、地元の沿岸警備船に見つかって船は拿捕された。同じころ、ボルネオ島経由など他にも密航事件が相次いで発覚した。移民会社への手数料、査証などの支払い免除を目的とした不法入国だったが、地元紙の邦人移民批判の格好の材料になった。当時のダバオ日本人会会長は大城孝蔵で、沖縄県知事や外務大臣宛てに密航取締り強化の要請文を送っている（蒲原 1938：105-107；金武町史編さん委員会 1996a：570-571）。密航はその後、途絶えたようで、沖縄人はブラジルへの移民のような移住禁止対象にはならなかった。

ダバオに向かう沖縄人移民がマニラ上陸の際、浴衣がけや下駄履きで市内を歩き回ったことが、在留邦人の中で問題になったこともある。マニラの日本人会が発行する邦字紙「商工新報」（1925年7月1日）は、「旅の恥はかきすて」であり、「一般日本人が迷惑している」と批判する記事を掲載した（村井 1979：39）。

本土日本人が沖縄人に対して優越感を持っていたことは、本土移民の証言からもうかがえる。例えば、両親が大分県出身で1928年にダバオで生まれた内田達男は「本土の人間は沖縄県人の生活レベルが低いとみなしていた」という¹⁶⁾。沖縄人と本土日本人の生活レベルの相違を立証する数的データは、筆者の手元にはない。しかし、おおまかな傾向は、当時出版の書物から推察できる。蒲原廣二（1938：1433-1579）の大書『ダバオ邦人開拓史』の最後には、「第一線に活躍する人々」として成功者かそれに近い邦人男性429人の出身地を含むプロフィールが掲載されている。マニラ麻栽培者が中心だが、429人中、沖縄出身者は69人にすぎない。また、海外研究所所長、大宜味朝徳（1935：227-240）は著書『比律賓群島案内』でダバオの有力日系15社を紹介しているが、うち沖縄人が経営するのは、資金繰り悪化の責任を取る形で太田興業を退社した大城孝蔵が経営のラヒ・リバー拓殖、赤峯の南ミンダナオ興業、そして大里村出身者の名前をつけた新垣福仁耕地の3社だけである。

沖縄からの移民男性は、同郷人が経営の麻畑で、ボホール島、レイテ島などから国内移住してきたビサヤンや、バゴボ族ら先住民の現地労働者と一緒に肉体労働にあたった者が多い。彼

らは仕事のときは地元の労働者同様に裸足で働き、食事も多くの場合、手づかみだった¹⁷⁾。そして、前述の宜野座や池原がそうだったように、フィリピン人との協働や交流を通して現地語をある程度マスターした。

当時、ダバオで共通語に近かった言語は、スペイン語と土着の言語が混成したチャバカノ語だった。その言葉の中のいくつかは、沖縄移民の間でよく使われるようになった。「コンパ (compa)」(共同, 共同事業), 「パタイ (patay)」(死ぬ), 「タンキ (tangke)」(水タンク), 「ギリン・ギリン (giling giling)」(頭がおかしい) などである。一方で、麻の引き屑の中でよく育った「ナーバ」(キノコナバ) という沖縄方言が現地人の間に広がって使われていたという(金武町史編さん委員会 1996a: 301)。こうした言葉の「相互乗り入れ」は、沖縄人が労働現場などで本土日本人以上に深く地元フィリピン人と交流していた証と考えられる。

沖縄移民研究の先達、石川友紀(1986: 230)は、戦前期の東南アジアにおける沖縄移民について「その大部分が純粋な移民としての労働者であり、階層的には支配者層である白人や日本本土出身移民と現地人との中間層に位置していた」と指摘した。ダバオでは大城孝蔵、赤峯三郎はじめ「支配者層」に属した沖縄人移民も少なくない。それでも、多数派は他人名義の土地で働いた農業労働者である。雇われ労働者の賃金はフィリピン人労働者よりは数割ぐらい高く¹⁸⁾、石川のいう「中間層」とみなすことができる。

V. 沖縄人の婚姻行動

戦前期、日本人の海外移民一世は、北米でも南米でも日本人同士の民族内結婚 (in-marriage) が圧倒的多数だった。ところが、ダバオの場合は300人ぐらいの一世男性が現地女性を妻、あるいは内妻にし、フィリピン人との人種混交がある程度進んだ¹⁹⁾。若い女性の売買婚が盛んだったボリビアの内陸部などを除けば²⁰⁾、ダバオほど局地的に「国際結婚 (intermarriage)」²¹⁾ 多発現象が起きた邦人入植地は、他地域ではなかったとみられる。過去のダバオ在留邦人研究はこの点を余り重視していないが、筆者は彼ら「国際結婚組」を邦人社会膨張の牽引役とみている。

当時のフィリピンの公有地法(1903年制定)は、外国人個人の土地所有を認めておらず、1919年に立法化された新公有地法によって、合弁会社も資本の61%以上がアメリカ人かフィリピン人のものでない限り土地の購入も貸与もできなくなった²²⁾。太田興業や古川拓殖のように、資本力があり、地元有力者との人脈を築けた日系企業は、アメリカ人やフィリピン人をビジネスパートナーとし、彼らを自社の役員に取り込んで新公有地法の外資制限をクリアした。しかし、資本力も地元人脈も乏しい邦人のマニラ麻栽培者たちは、外国人による土地や資源の「収奪」を食い止めようとする土地関連法によって、死活問題に直面した。こうした難局下で、「国際結婚」は邦人男性がダバオで生き延びる手段にもなった。フィリピン人の妻(内妻)の一族が所有する土地で合法的に耕作することができたからだ。伴侶にした女性は多くの場合、先住民のバゴボ族だった。

マニラ麻の耕作に適したダバオ地域の土地の多くはもともとバゴボ族の所有だった。このため、邦人移民の入植当初は、土地の所有や使用をめぐるバゴボ住民との間でいさかいが絶えなかった²³⁾。地主の承諾なく「侵入」してくるよそ者を殺害するのは、バゴボ社会では「勇敢

な行為」とみなされ、蒲原（1938：1235）によると、入植以来合わせて600人の日本人がバゴボ族ら「蕃族の毒刃」に斃れた。こうした土地紛争の仲介役となり、日本人のダバオ進出の促進役を果たしたのが、バゴボ女性と結婚した移民一世の男性たちである。最初の「国際結婚組」の多くは、ルソン島の山中で過酷な労働に耐え抜いたベンゲット移民の中のダバオ転進組だった。

前述の『ダバオ邦人開拓史』巻末の「第一線に活躍する人々」として紹介される邦人男性429人の中で、横顔紹介などから、フィリピン人を妻にしていた者が14人は確認できる。この中に沖縄人はいない。出身地で多いのは熊本、福岡などの九州と、広島、岡山などの中国地方である（蒲原 1938：1433-1579）。この中から、2,000ヘクタールという広大な土地を有す農事会社「バヤバス拓殖」の社長になった吉田円蔵（福岡県出身）、900ヘクタール余りの農事会社「バト拓殖」社長の只隈與三郎（福岡県出身）、「ダバオ製材界の王者」と言われたテブンコ木材社長の溝部長男（岡山県出身）ら、成功者が何人か現れ、ダバオ日本人会の役員としても活躍した²⁴⁾。

フィリピン女性を伴侶にした沖縄男性も何人かいた。例えば、名護出身の神山鴻吉はモロ族の名家の娘と結婚した。彼はラサン地区でモロ族の酋長をしのぐほどの信望と影響力をモロの社会で持ち、農事会社「ラサン拓殖」の社長として、多数の日本人移民のダバオ入植に貢献した。また、赤嶺兄弟の一人、亀次郎はビサヤンをめとり、ブナワン地区の開拓で重要な役割を果たした（蒲原 1938：723-724、柴田 1942a：58, 312-313；仲原編 1943：28）²⁵⁾。本部村出身の興儀三郎はバゴボ女性と正式結婚し、妻名義の24ヘクタールの土地で麻栽培を営んだ²⁶⁾。

ダバオ在留沖縄人についての過去の研究はしばしば、沖縄男性の方が日本本土の男性よりもバゴボ族などのフィリピン女性との結婚を好む傾向があった、と指摘している（例えば、Saniel 1966: 118; Hayase 1999: 280; Penas 2002: 45）。Cody（1959：184）の「特にバゴボ族の居住地で最も親密に住む傾向があったのは沖縄人。日本人農民とバゴボ娘の間の結婚や内縁の取り決めはかなり一般化した」という記述が、この「神話」の起源とみられる。沖縄人を含む邦人移民一世や二世にインタビューを重ねた筆者の調査結果は、全く逆である。『ダバオ邦人開拓史』からも読みとれるが、九州、中国地方など西日本を中心とする本土出身男性がバゴボ族をはじめとする現地女性を妻や内妻にしたケースが、沖縄男性よりもはるかに多い²⁷⁾。この傾向は、ダバオの邦人男性と現地女性の間生まれた子供とその子孫の団体「フィリピン日系人会」(Philippine Nikkei-Jin Kai；本部・ダバオ市)登録の二世678人（2005年10月時点。死亡を含む）の中で沖縄人の父親を持つメンバーは少数派であることから裏づけられる²⁸⁾。

ダバオの邦人社会は、女性が多いときでも男性はその2倍以上と偏りが大きく、現地視察の日本人ジャーナリストに「女飢饉」（古澤 1936：77）や「妻帯難・女房ききん」（猪伏 1936：305）と揶揄されるほどだった。しかし、沖縄移民に限っていえば、郷里の女性を「呼び寄せ嫁」としてダバオに迎え入れるのは比較的、容易だった。沖縄では、ダバオ帰りの男性は成功のあかしとして当時、村内で珍しかった瓦葺きの家屋を新築したり、おしゃれな洋服を着用している者が少なくなかった。このため、村の独身女性の憧れの的になり、自ら志願して花嫁移民としてダバオに渡航する女性が続出した（金武町史編さん委員会 1996b：129, 175, 226, 240）。ダバオは果物はじめ食物が豊富、台風とは無縁で気候的にも沖縄より生活しやすかった。「フィ

リピンは楽園だった」と、戦前のダバオ生活を回想する移民一世の沖縄女性もいる（同：156-158）。ダバオ人気を反映して、1920年10月時点で144人にすぎなかったダバオ在留沖縄女性は1936年10月には2,228人（うち成人は1,137人）に急増している（蒲原 1938：744-745,750-751）。

一方で、沖縄移民男性の間では「フィリピン嫁をもらおうと、嫁の大勢の親族に財産を食いつぶされる」とよくいわれた。実際、先住民女性を妻にした邦人男性が一人で妻方の大家族20-30人を養うはめになり、一族の「米びつ」の役割を担ったケースが、当時の在ダバオ日本領事館作成の現地視察報告書にもある²⁹⁾。このため、金武村などではフィリピン女性との結婚をタブー視する風潮が広がり、移住前に「フィリピンの娘を嫁にするな」と家族や親族に言い渡されて送り出された独身男性が多かった³⁰⁾。また、沖縄では明治期まで他の村落の者との婚姻を規制する習慣が残っていたといわれる（比嘉 1986：197）。こうした当時の内婚志向の強さも、沖縄男性と現地女性との結婚を限定的なものにした要因と考えられる。また、バゴボ族の間には、沖縄男性は「気難しい」などといった負のイメージがあり、日本本土男性の方を結婚相手としてより好む傾向があった、という証言がある³¹⁾。

沖縄人と本土日本人の間の結婚は、大城孝蔵のケースなどを例外として、ダバオでもほとんどなかった³²⁾。両グループはともにダバオ日本人会に所属し、土地問題などでは共同歩調をとって、フィリピン当局の邦人移民排除策に対抗した。しかし、婚姻面では、日本本土にあったのと同様の根強い偏見や差別意識を反映し、フィリピン人との間以上のエスニック隔離が存在した。

VI. 「ダバオ国」崩壊過程における沖縄人

ダバオの在留邦人を取り巻く環境は、1931年の満州事変を境に急速に悪化し始める。翌年、日本の傀儡国家「満州国」が樹立される。日本は国際的非難を浴び、1933年に国際連盟を脱退。このころから、地理的に日本に近いフィリピンでは対日恐怖症が広がっていく。「小日本」のダバオは、大日本帝国による他のアジア支配の布石とみなされる向きが強まり、「満州国（クォ）」をまねた「ダバオ国（クォ）」という造語が米国やフィリピンのメディアでよく使われるようになる。1935年には「パキアオ・システム（自営者制度）は土地法で禁止される事実上の又貸し」というロドリゲス農商務長官の判断のもと、フィリピン人やアメリカ人の地主と邦人のテナントとの間に結ばれた土地契約が100件以上、無効とされた。その後も「ダバオ土地問題」はしばしばフィリピンの政界や言論界をにぎわし、在留邦人は安住できない日々を送った（蒲原 1938：289-323）。

「日米開戦は間近」との観測が流れ、米比当局による在留邦人のビジネス制限が強まるにも関わらず、大多数はダバオを離れなかった。フィリピンに戦雲がたちこめても身の安全を考えて帰国する道を選ばなかったのは、諸隈弥作・太田興業社長が指摘したように、苦労を重ねた末に所有権や耕作権を獲得した土地への執着がそれだけ強かったためであろう（『比律賓情報』1942年1月号：42）。

1941年12月8日の日本軍のハワイ・真珠湾攻撃以後、フィリピンは全土が日米の激戦地になる。日本軍は真珠湾攻撃当日にはやダバオのササ飛行場をはじめとするフィリピン国内の米軍施設に空爆を加えた。ダバオでは、同月19日までに17,620人の在留邦人が地元の小学校などに

抑留された（同：92；森 1993：245）。日本軍は同月20日にダバオに上陸して抑留邦人の解放にあたった。この解放作戦の際、抑留されていた日本の民間人50人前後が米比軍の警備隊員に殺害される事件が起きている³³⁾。バンキロー闘鶏場での銃乱射事件では、金武村出身者6人も犠牲になった（金武町史編さん委員会 1996a: 340）。その後、3年余りダバオは日本軍の支配下に置かれた。この当時、ダバオの在留邦人の過半数が沖縄人だった。1943年1月までのダバオ日本人会の調査では、19,089人の在留邦人のうち沖縄県人は10,166人と、全体の53%を占めた（『マニラ新聞』1943年1月23日）。

日本軍占領当初、在留邦人たちは収容所から解放してくれた恩義もあり、自警団員、通訳などとして日本軍に積極的に協力する。東南アジアや南洋群島の在留邦人はそれまで在外徴集延期制度の対象だったが、1943年10月にこれらの地域でもこの制度の適用が廃止され、ダバオの在留邦人男性も次々と現地徴集された（『マニラ新聞』1943年10月1日）。

日本軍政下で在留邦人はそれまでの様々なビジネス制限から解放された。しかし、当初、期待したようには邦人の産業活動は発展しなかった。逆に、ダバオの基幹産業であるマニラ麻ビジネスは壊滅的打撃を受ける。物資の現地調達を基本方針とする日本軍は、同胞の農業者が多いダバオを「食糧補給基地」と位置づけ（『ダバオ会報』1968年11月号：25-27）、麻を切り倒して野菜や穀物作物に転作するよう麻栽培業者に命じた。また、沖縄人を主とする麻栽培労働者の半数以上が、空港など軍事施設の建設に動員された。太田興業と古川拓殖も穀物や野菜の栽培を命じられ、軍のご用達会社と化した。麻事業は各社とも麻痺し、ダバオのマニラ麻産業は1944年までにほぼ壊滅した（古川 1956：244, 333-340）。

日本軍司令部はダバオ在留沖縄人をどうみていたのだろうか。フィリピンに駐留の軍政監部将校が終戦後まもなく作成した報告書では「外務省大商社ノ関係者ヲ除キテハ戦前在比日本人ハ概ネ漁業、麻栽培、大工等ヲ主業トシ大部分沖縄縣出身者ナリ一般ニ教養低ク禮節に乏シク特ニ下流比島婦人トノ結婚に依り出生セシ日本籍二世ニ於テ甚タシ」と書かれている（犬塚 1946：17）。日本政府は当時、地理学的調査を踏まえて「熱帯地での長期間の生活で民族の資質は低下する」との見方を持っており³⁴⁾、沖縄人への偏見も加わって、在留邦人をレベルの低い日本人とみなす傾向が強かった（日本のフィリピン占領に関する史料調査フォーラム編 1994：437）。日本陸軍は1940年6月に「総合国策十年計画」を立案したが、その中では「大和民族の純潔性維持」や「雑婚排除」をうたっている（稲葉ら編 1983：306-315）。この方針も影響してか、先の軍政監部将校の報告書は、現地女性を妻としてめとった邦人一世とその子供の日系二世たちに対して特に強い偏見と差別意識を抱いていたことをうかがわせる。

1944年6月、米軍はサイパン島に上陸、1カ月もたたずに同島の占領を宣言する。「次はフィリピン」との危機感を抱く日本軍政当局はまもなく、ダバオ在留の婦女子を含む邦人全員を軍属として扱うとの「超非常措置」の方針を通達した（『ダバオ新聞』1944年7月29日）。これによって、在留邦人は例外なく日本軍の一員になった。米軍は翌年4月にはミンダナオ島に南部海岸から上陸を開始。以後、ダバオの邦人たちは日本軍の避難命令にしたがって、内陸のタモガン溪谷に向けて逃避行を始める。日本軍はこの溪谷に農業技術のある邦人を集め、自給自足体制を確立して持久戦を展開する作戦だった。日本軍への食糧供給のためダバオ市に居残っていた在留沖縄人多数も日本軍とともにタモガン溪谷に向かった。しかし、ジャングルで覆われ

て少数の先住民しか暮らしていないタモガンで、軍民2万人以上が自給自足を送るにはもともと無理があった。在留邦人は着のみ着のまままで避難し、携帯食も限定的だった³⁵⁾。

飢えに苦しむ日本兵の中には、出会った同胞の民間人から携帯食を奪う者が出始めた。ダバオで日本人小学校の校長をしていた吉田實（1946：41）は手記の中で、稲田でコメを収穫しようとした沖縄人12人が日本兵3人に集団虐殺されたことを記している。また、沖縄移民一世の女性は、沖縄婦人と彼女の4歳と9歳の子供2人が、泣き叫ぶ子供の口封じを理由に本土兵士2人と沖縄の民間人1人に殺害された、と筆者に証言している³⁶⁾。手榴弾を投げつけられて殺され、食料を奪われた子供もいる。邦人母子が友軍に撃たれて食料を奪われたという情報も避難民の間に広がり、日本兵は米兵よりも怖い存在になった（同：47-50；吉田美明 1963：294；金武町史編さん委員会 1996b：203；新崎 2000：281）。このため、避難の沖縄人の中には、バゴボ族の妻を持つ沖縄移民から紹介された酋長の一族と行動をとともにし、銃で日本兵を威嚇して身を守った者もいた（新崎 2000：279-282）。タモガン溪谷で日本兵に殺害された民間邦人の総数は今も不明だが、判明分では沖縄人の犠牲が目立つ。この背景には、沖縄戦の最中に沖縄で頻発した日本軍の住民虐殺事件と似たような事情、つまり日本本土兵士の沖縄人に対する民族的偏見や沖縄人の皇軍に対する忠誠心への疑義が存在した可能性もある³⁷⁾。

タモガンでは、栄養失調、マラリアなどの病気、さらには米軍の爆撃などで日本人多数が死亡した。終戦に伴って、生き残った者は一斉に投降し、ダバオ市のダリアオン捕虜収容所には1945年10月12日時点で兵士、民間人合わせて約14,000人の邦人が収容されていた（外務省外交史料館 K'7.1.0.1-2-10 「『^{ママ}フィリピン』在留邦人ノ状況(2)」）。被収容者の多くは逃避行中にマラリアなどの病気に罹患したり、栄養失調状態に陥って衰弱しており、収容所の中で息を引き取る者が続出した。この中には多数の沖縄人が含まれる³⁸⁾。ダバオ日本総領事館の記録では、戦時中の一般邦人の犠牲者は約4,800人、将兵の戦病死者は10,150人、このほか、収容所で一般在留邦人3,700人、軍人・軍属7,255人が死亡したという（石原 1983）。

アジア・オセアニアの各地で収容された日本人は、連合国の方針によって一律に祖国への引揚げを命じられた。ダバオからの船舶による引揚げは1945年10月から始まっている。その第1陣の引揚船が同月24日に広島・宇品港に入港したが、引揚民1,370人中、1,165人は沖縄県人だった。この大半は児童だったが、半病人状態がほとんどで、「発狂者」の女性もいた。身なりは素足、衣服は破損し、外務省文書は「其ノ惨状目ヲ覆ハシムルモノアリ」と記している（外務省外交史料館 K'7.1.0.1-2-10, K'0006）。

沖縄人の引揚者は、連合国最高司令部から「琉球人」と呼ばれ、中国人、台湾人、朝鮮人とともに「非日本人」に分類された。そして、終戦の年に日本本土に引き揚げた者も翌夏ごろまで、主に軍事上の理由から沖縄への帰郷を許されなかった。このため、沖縄人引揚者はしばらく大分、神奈川、埼玉など本土の疎開地で「琉球人難民」として不自由な生活を強いられた。この疎開中に亡くなった沖縄人引揚者が少なくない。ダバオで体力を使い果たしていたこともあり、金武村出身者だけで53人が引揚げ後、本土で亡くなったことが確認されている（日本・厚生省引揚援護庁 1950：資料5-38；金武町史編さん委員会 1996b：101；同 1996a：353）。

連合国最高司令部が1946年から49年にかけて出した「引揚に関する基本指令」には、沖縄人が「非日本人」になった理由は記されていない。しかし、ここには、450年に及ぶ琉球王国の歴

史を持ちながらも明治期の琉球処分で日本に併合された沖縄の住民を「非日本人」に分類することで、アジア太平洋における軍事的要衝とみなす沖縄の分離統治を正当化しようとした米国側の意図がうかがえる。

VII. むすび

ダバオにおける沖縄移民は、全般に日本本土移民に比べて資本力を欠き、徒手空拳で渡航した者が圧倒的多数である。それを補ったのが、ウチナーンチュ（沖縄人）としての強いアイデンティティに基づく濃密な人的ネットワークだった。彼らは村・^{あざ}字単位の地縁や血縁を頼って入植し、マニラ麻畑で厳しい仕事に明け暮れた「労働ディアスポラ」(labour diaspora)が大半である³⁹⁾。蓄財して錦糸帰郷を夢見る出稼ぎ移民が中心だったが、中には、本土日本人ほど多くはないものの、先住民はじめフィリピン女性をめぐって血縁を広げ、現地社会に根をおろした永住志向組もいた。彼らは労働現場で先住民や国内移民のフィリピン人労働者と苦楽をともにし、事務管理職も多い本土日本人とは異なる「もうひとつの日本人」として地元住民により身近な存在だった。沖縄人は大城孝蔵はじめ「支配層」に属した者も少なくはなかったが、多数派は農園主と低賃金のフィリピン人労働者の間に位置する「中間層」を形成した。寝食をともにする暮らしの中で、沖縄人とフィリピン人の間には文化の相互乗り入れも限定的ながら存在した。彼らは「楽園」と思えたダバオで繁栄の土台を着実に築きつつあった。

しかし、日本軍のフィリピン占領下では、沖縄人の大半が農業移民であることが災いした。ダバオは日本軍の南方作戦遂行のための食糧基地と位置づけられたため、麻畑は穀物農地に転作を強いられた。徴兵忌避目的で移住した男性も現地で徴兵・徴用され、婦女子を含む在留邦人全員が大日本帝国に正規メンバーとして組み込まれた。自由移民が民の力で築いた「ダバオ国」はこの時点で、軍民一体の「満州国」と性格を共有することになる。その結果、日本軍政下で極度に生活が悪化した大多数のフィリピン人にとっては、沖縄移民も「敵性国民」となった。日本軍は最後には、移民の存在理由であるマニラ麻産業自体を壊滅させたうえ、飢餓地獄の中で沖縄人ら同胞の命を奪ってまで生きのびようとした。戦後の祖国引揚げに際し、沖縄人が突如、非日本人の「琉球人」にエスニック・ラベルを貼りかえられた背景には、アジア太平洋における米国の新たな軍事戦略があった。日本と米国、「日本人」と「非日本人」の間で運命を翻弄され、長年の労働の果実も、また愛する家族の命さえも失わざるを得なかったのがダバオの沖縄移民である。

注

- 1) 當山久三の生涯については、金武町史編さん委員会 1996a：521-554、大城孝蔵の生涯については、同：555-584、石田 1991などが詳しい。
- 2) 日本人労働者の死亡率は他の国の労働者に比べて高かったが、「ベンゲット移民の犠牲700人」説については、はるかに少ない数字が記録される米国側の史料を調べた早瀬（1989：169-172）から疑問が出されている。
- 3) 1930年代半ばから40年代初めにかけてフィリピンを視察旅行した仲原善徳（1941：323-

- 327) は、ルソン島北部の山間地にあるポントックかその周辺に「大城」という妻子持ち男性が定住していることを記している。姓から沖縄人と推測されるが、詳しくは不明。
- 4) 北ルソン比日友好協会の調べでは、2002年10月現在、230人の日系二世が登録されている。この中に沖縄人の親を持つ者が22人いる。この全員が、戦後の沖縄移民の子供である。協会設立者の一人、寺岡マリエ（二世）は「戦前の沖縄移民の二世は、いまバギオ周辺にはいないと思う」と語っている（2002年10月11日、バギオ市で寺岡へのインタビュー）。
 - 5) 太田興業は三井物産マニラ支店、古川拓殖は古川社長の親族が役員を務める伊藤合名（伊藤忠の前身）から財政面などの支援を受けた（入江 1938：443；古川 1956：262）。
 - 6) 太田恭三郎の生前の功績を称える記念碑が1926年、日本人、アメリカ人、フィリピン人の寄付をもとにダバオ・ミンタル地区に建てられた（古川 1956：130-133）。記念碑は今も現地の小学校校庭に残存している。マニラ日本人小学校（1938：63）が戦前、編集、発行の課外読本で、太田は「ダバオ開発の恩人」として紹介されている。
 - 7) 宜野座仙五郎へのインタビュー（2001年10月18日、沖縄・金武町で）。
 - 8) 池原金英へのインタビュー（2001年10月18日、沖縄・金武町で）。
 - 9) バゴボ族男性のサントス・イダルへのインタビュー（2002年9月24日、ダバオ市で）。イダルは在留邦人の多かったダバオのカリナン地区で育ち、姉といとこが日本本土出身の男性と結婚している。
 - 10) 松尾啓助へのインタビュー（2003年1月24日、岡山市で）。
 - 11) 水口博幸へのインタビュー（2002年9月7日、ダバオ市で）。
 - 12) 1927年ダバオ生まれで両親とも沖縄人の中村源照へのインタビュー（2001年10月15日、那覇市で）と、1932年ダバオ生まれで母親がバゴボ族の與儀安二へのインタビュー（2003年8月19日、ダバオ市で）。
 - 13) 金武町史編さん委員会（1996a：289）は、フィリピン人の間に「オトロ・ハポン」という呼称があったことについて、沖縄人の現地人との友好・信頼関係の良好さの反映との見方を示したうえで、「同じ被差別・抑圧された共通の民権敵^{ママ}立場を感じていたのかも知れない」と述べている。
 - 14) 本土日本人の沖縄人に対する偏見や差別を象徴する出来事として有名なのが、1903年に起きた「人類館事件」である。大阪で開催された内国勸業博覧会会場で「人類館」と称する見世物小屋が設けられ、アイヌ、朝鮮人らとともに「琉球」の女性2人が見世物にされた（真栄平 1999：23-35）。
 - 15) 戦前のブラジルでは、日本本土出身の労働者らが地元の農園経営者や労働者と語る際、沖縄人のことを「真の日本人」ではなく、「二級の日本人」と紹介していたという（Mori 2003：51）。
 - 16) 内田達男へのインタビュー（2002年8月29日、ダバオ市で）。
 - 17) ダバオで麻畑の「自営者」だった本部村出身、並里弘之の四男・並里裕人へのインタビュー（2001年10月15日、那覇市で）。
 - 18) 1938年にダバオに渡って麻畑で労働者として働いた金武村出身の仲間政儀は、1日の労賃が草取りは日本人が50セントボ、フィリピン人は30セントボ、皮はぎは日本人が1ペソ、

フィリピン人が80センタボ，と証言している（金武町史編さん委員会 1996b: 165）。センタボはフィリピンの通貨で，100センタボが1ペソ。

- 19) フィリピン政府の1939年のセンサス調査によれば，フィリピン人の妻を持つ在留邦人男性はフィリピン全土で874人だった。この中では，ダバオ州が269人と飛び抜けて多く，続いて西ネグロス州（66人），マウンティン・プロビンス（ルソン島北部），マニラ市（各64人）の順に多かった（The Philippines, Commission of the Census 1941: Vol. II, 465）。
- 20) ボリビアの北部アマゾン流域地帯では，日本の姓を持つ千人単位の日系人が居住する。彼らは，20世紀初頭に入植しゴム産業や商業活動に従事した日本人男性と現地女性の間生まれた混血児の子孫である（Amemiya 2002: 91）。この地域の先住民社会では日本人の入植当時，経済的にゆとりのある者が貧しい少女をもらって育てる習慣があり，少なからぬ邦人男性がこうした女性を買い受けて「妻」にしたという（国本 1999: 17）。
- 21) 「国際結婚」と「」付きで表記するのは，ダバオでは地元の役所に届け出をしない非公式な婚姻が多かったからである。この背景には，合法的結婚だと，当時のフィリピンと日本の市民権・国籍関連法にしたがって，フィリピン人妻は結婚と同時に日本国籍になり，フィリピン国籍を喪失して土地所有権も失う問題があった。このため，妻は入籍しないで「内妻」にし，子供たちは「非嫡出子」にした日比カップルが多い。詳しくは，Ohno 2005: 55-56, 91-103。
- 22) ダバオにおける邦人耕作者の土地問題についての詳細は，Jose P. Laurel Papers, "Davao Land Cases etc."; Farolan 1935; 蒲原 1938: 247-456; Goodman 1967など参照。
- 23) バゴボ族と邦人入植者の間のトラブルについては，H. Otley Beyer Collection, 1919a; 1919bに詳しい。
- 24) 吉田円蔵については，蒲原 1938: 1461-1462; 柴田 1942a: 59; 柴田 1942b: 288-290参照，只隈與三郎については，蒲原 1938: 1457参照，溝部長男については，同: 1448; 古川 1956: 192-194参照。
- 25) ダバオで発行された邦字紙『ダバオ新聞』（1943年5月11日）は，神山鴻吉が「モロ族の酋長になった」と報じている。神山と赤嶺亀次郎の二人とも現地で病魔に侵され，フィリピンに骨を埋めた。2人は『ダバオ邦人開拓史』の中で「ダバオ開拓の功労者（故人）」9人の中に加えられている（蒲原 1938: 709-724）。
- 26) 與儀三郎の二男・與儀安二（1932年生まれ）へのインタビュー（2003年8月19日，ダバオ市で）。
- 27) 筆者は2001年10月，沖縄県で戦後ダバオから引き揚げた沖縄人一世2人，沖縄人二世14人にインタビューしたが，全員が「沖縄出身者でフィリピン人を妻にしたケースは，日本本土出身者よりはずっと少なかった」と述べた。
- 28) 戦後もダバオに居残った與儀安二は「ダバオに住む沖縄二世は30人から50人くらい」と筆者に語っている（2003年8月19日，ダバオ市で）。
- 29) 外務省外交史料館 J.1.2.0.J2-5, 「『ダヴァオ』ニ於ケル蛮人耕地入植邦人状況」（1932年11月17日）: 18-27。
- 30) 池原金英へのインタビュー（2001年10月18日，金武町で）。池原は「金武村の人でフィリ

ピン嫁がいたのは2世帯くらい」と証言している。

- 31) サントス・イダルへのインタビュー（2002年9月24日，ダバオ市で）。
- 32) 筆者が2001年10月に那覇市でインタビューしたダバオ帰りの沖縄二世10人は「ダバオで沖縄男児が日本人嫁をもらったケースは聞いたことがない」と口をそろえた。
- 33) 「ダバオ邦人虐殺事件」としてよく知られるのは、「大阪バザール事件」と「バンキロー闘鶏場事件」である。前者は抑留邦人向けの食事に毒を盛ることを拒んだ邦人10人が邦人経営の大阪バザールでのどをかき切るなどして殺され，後者はバンキロー闘鶏場に収容の邦人24人が飛来してきた友軍の戦闘機を見上げようとしてフィリピン人の警備隊員に銃撃を受けて死亡した，とされる（『ダバオ新聞』1942年12月20日；森 1993：249-252）。
- 34) 1942年1月31日の衆議院予算分科会で，安倍企画院次長と秋山・同第一部長は，熱帯地での「民族の資質低下」の調査結果をもとに，邦人の熱帯への大量進出に否定的な見方を表明している（『比律賓情報』1942年3月号：122-123）。
- 35) 戦時期にダバオ日本人会会長を務めた上原仁太郎は戦後，在留邦人が避難時に余り食料を携帯しなかった理由について，「日本軍が食料持ち出しの必要なしと指示したため」と述べている（外務省外交史料館 K7.1.0.1-2-10「川崎同胞援護会々長 上原仁太郎氏訪問に関する報告」1946年？8月5日）。
- 36) タモガンなどを避難行の最中，長男を餓死で亡くした玉城カメ（1911年，ハワイ生まれ）へのインタビュー（2002年8月28日，ダバオ市で）。
- 37) 沖縄戦の最中，日本軍将兵によって殺害された沖縄住民は200人以上とみられる。殺害は多くの場合「防諜のための処刑」として行われた。沖縄戦問題に詳しい大城将保（1977：312）は，住民虐殺の背景に「皇軍のゆがんだ沖縄観，沖縄差別の意識があった」と指摘している。
- 38) 1993年9月17日付の『沖縄タイムス』（朝刊）は，ダバオの邦人収容所で亡くなった730人の名簿がこのほど公開され，姓から判明するだけでも170人の沖縄県出身者がこの中にいる，と報じている。
- 39) 「労働ディアスポラ」は，Robin Cohen（1997:x）が世界に散らばるディアスポラを5分類した中の一つ。他の4分類は，「犠牲ディアスポラ」（victim diaspora），「帝国ディアスポラ」（imperial diaspora），「商業ディアスポラ」（trading diaspora），「文化ディアスポラ」（cultural diaspora）である。

文 献

（日本語）

- 新崎盛秀，2000，「ふるさとの土」，田中義夫編『異国のふるさとダバオ』私版：279-284。
- 石川友紀，1986，「沖縄県から東南アジアへの移民の歴史」，島袋邦・比嘉良充編『地域からの国際交流ーアジア太平洋時代と沖縄』研文出版：203-236。
- 石田磨柱，1991，『ダバオ開拓の祖 大城孝蔵』（手書き）秋田文化出版。
- 石原喜与次，1983，『黒いアバカーフィリピンダバオ元日本人小学校一教師の手記』（私版）。

- 伊藤友次郎, 1917, 『南洋年鑑興信録』 日南公司南洋調査部
- 稲葉正夫ら編, 1983, 『太平洋戦争への道 別巻 資料編』 朝日新聞社.
- 犬塚恵亮, 1946, 「比島軍政ノ概要」, 『南方作戦二伴フ占領地行政ノ概要』 復員庁第一復員局
(防衛庁防衛研究所所蔵).
- 猪伏 清, 1936, 「ダバオの日本人」, 長谷川了編 『南方政策を現地に見る』 日本外事協会: 267-314.
- 入江寅次, 1938, 『邦人海外発展史 上巻』 移民問題研究会.
- 大宜味朝徳, 1935, 『比律賓群島案内』 海外研究所.
- 大城将保, 1977, 「住民虐殺事件」, 沖縄県編 『沖縄県史別巻 沖縄近代史辞典』 沖縄県: 312-313.
- 大谷純一編, 1939, 『比律賓年鑑 (昭和十五年度版)』 田中印刷出版.
- 蒲原廣二, 1938, 『ダバオ邦人開拓史』 日比新聞社.
- 金武区誌編集委員会, 1994, 『金武区誌 戦前編下』 金武区事務所.
- 金武町史編さん委員会, 1996a, 『金武町史第一巻移民・本編』 金武町教育委員会
- 金武町史編さん委員会, 1996b, 『金武町史第一巻移民・証言編』 金武町教育委員会.
- 国本伊代, 1999, 「日本人のポリビア初期移民に関する一考察」, 『移民研究年報』 6: 3-19.
- 今野敏彦・藤崎康夫, 1996, 『増補 移民史Ⅱ アジア・オセアニア編』 新泉社.
- 柴田賢一, 1942a, 『ダバオ開拓記』 興亜日本社.
- 柴田賢一, 1942b, 『南洋の歴史と現実』 帝国産業法規社.
- 東亜経済調査局, 1936, 『最近の比律賓』 東亜経済調査局.
- 富山一郎, 1990, 『近代日本社会と「沖縄人」-「日本人」になるということ』 日本経済評論社.
- 富山一郎, 1993, 「ミクロネシアの『日本人』 - 沖縄からの南洋移民をめぐって」 『歴史評論』
513: 54-65.
- 仲原善徳, 1941, 『比律賓紀行』 河出書房.
- 仲原善徳編, 1943, 『バゴボ族覚書』 改造社.
- 日本・厚生省引揚援護庁, 1950, 『引揚援護の記録』 厚生省引揚援護庁.
- 日本のフィリピン占領に関する史料調査フォーラム編, 1994, 『インタビュー記録 日本のフィリピン占領』 龍溪書舎.
- 橋谷 弘, 1985, 「戦前期フィリピンにおける邦人経済進出の形態 - 職業別人口調査を中心として」 『アジア経済』 26 (3): 33-51.
- 早瀬晋三, 1989, 『「ベンゲット移民」の虚像と実像 - 近代日本・東南アジア関係の一考察』 同文館.
- 早瀬晋三, 1996, 「『ダバオ国』の在留邦人」, 池端雪浦編 『日本占領下のフィリピン』 岩波書店: 291-332.
- 比嘉政夫, 1986, 「沖縄の文化的特性と国際交流」, 『地域からの国際交流 - アジア太平洋時代と沖縄』: 181-201.
- 古川義三, 1956, 『ダバオ開拓記』 古川拓殖株式会社.
- 古澤磯次郎, 1936, 「ダバオの現地を訪ねて」, 長谷川了編 『南方政策を現地に見る』 日本外事

協会：55-106.

古屋白夢, 1940, 「南方開拓の尊い捨石」, 『海を越えて』 3 (4) : 10-12.

真栄平房昭, 1999, 「人類館事件－近代日本の民族問題と沖縄」, 石井米雄・山内昌之編 『日本人と多文化主義』 山川出版 : 23-35.

マニラ日本人小学校編, 1938, 『フィリピン読本』 マニラ日本人小学校.

村井孝夫, 1979, 「《沖縄移民研究ノート》第2部 沖縄移民をめぐる差別の底流」, 『季刊海外日系人』 6: 26-47.

村山明德, 1928, 『比律賓概要と沖縄県人』 文明社.

森 治樹, 1993, 「太平洋戦争とダバオ在留邦人」, ダバオ会編 『戦禍に消えたダバオ開拓移民とマニラ麻』 ダバオ会: 243-300.

米田正武, 1939, 「ベンゲット道路工事の思出を語る座談会」, 『海を越えて』 2 (12): 30-34.

吉田 實, 1946, 『比島引揚邦人の手記－ダバオの最後』 高松書房.

吉田美明, 1963, 「アバカは燃える」, 『文藝春秋』 6月号: 290-298.

[定期刊行物]

『ダバオ会報』 1968年11月号.

『比律賓情報』 1942年1月号, 同3月号.

[新聞]

『ダバオ新聞』 1942年12月20日, 1943年5月11日, 1944年7月29日.

『マニラ新聞』 1943年1月23日, 同10月1日.

『沖縄タイムス』 1993年9月17日朝刊.

[公文書]

外務省外交史料館 (在東京)

項目番号 J.1.2.0.J2-5. 「『ダヴァオ』ニ於ケル蛮人耕地入植邦人状況」(1932年11月17日)。

K'7.1.0.1-2-10. 「『フィリピン』在留邦人ノ状況 (2) 『ミンダナオ』地区」(1945年11月28日)。

K'7.1.0.1-2-10 「川崎同胞援護会々長 上原仁太郎氏訪問に関する報告」(1946年? 8月5日)

K'7.1.0.1-2-10. K'0006 (リール番号), 2504 (コマ番号) (年月日不明)

(英語)

Abinales, Patricio N., 1997, "Davao-kuo: The Political Economy of a Japanese Settler Zone in Philippine Colonial Society", *The Journal of American-East Asian Relations*, 6 (1): 59-82.

Amemiya, Kozy, 2002, "The 'Labor Pains' of Forging a Nikkei Community: A Study of the Santa Cruz Region in Bolivia", In Hirabayash, Lane Ryo, Akemi Kikumura-Yano and James A. Hirabayashi eds, *New Worlds, New Lives: Globalization and People of Japanese Descent in the Americas and from Latin America in Japan*, California: Stanford University Press: 90-107.

Anderson, Benedict, 1983, *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, London: Verso.

- Arakaki, Makoto, 2002, "Hawai'i Uchinanchu and Okinawa: Uchinanchu Sprit and the Formation of a Transnational Identity", In Nakasone, Ronald Y. ed., *Okinawan Diaspora*, Honolulu: University of Hawai'i Press: 130-141.
- Capili, Jose Wendell P., 1997, "The Relocalization of Japanese Immigrants in Davao, Southern Philippines", In Dela Cruz, Roland S. ed., *Image and Reality: Philippine-Japan Relations Towards The 21st Century*, Quezon City: University of the Philippines Law Center: 137-186.
- Cody, Cecil E., 1958, "The Consolidation of the Japanese in Davao", *Comment*, 7/ third quarter: 23-36.
- Cody, Cecil E., 1959, "The Japanese Way of Life in Prewar Davao." *Philippine Studies*, 7 (2): 172-186.
- Cohen, Robin, 1997, *Global diasporas: An introduction*. Seattle: University of Washington Press.
- Farolan, Modesto, 1935, *The Davao Problem*, Manila: n.d.
- Furiya, Reiko, 1993, "The Japanese Community Abroad: The Case Study of Prewar Davao in the Philippines", In Shiraishi, Saya and Takashi Shiraishi eds., *The Japanese in Colonial Southeast Asia*, New York: Cornell University: 155-172.
- Furnivall, J. S., 1939, *Netherlands India: A Study of Plural Economy*, London: Cambridge University Press.
- Goodman, Grant K., 1963, "Davaokuo? Japan in the Philippine Politics, 1931-1941", *Studies on Asia*, IV: 185-195.
- Goodman, Grant K., 1965, "A Flood of Immigration: Patterns and Problems of Japanese Migration to the Philippines during the First Four Decades of the Twentieth Century", *Philippine Historical Review*, 1 (1): 170-193.
- Goodman, Grant K., 1967, *Davao: A Case Study in Japan-Philippine Relations*, Center for East Asian Studies, The University of Kansas.
- Hayase, Shinzo, 1999, "The Japanese Residents of 'Davao-kuo'", In Ikehata, Setsuho and Ricardo Trota Jose eds, *The Philippines Under Japan: Occupation Policy and Reaction*, Quezon City: Ateneo de Manila University Press: 247-287.
- Kaneshiro, Edith M., 2002, "'The Other Japanese': Okinawan Immigrants to the Philippines, 1903-1941", In Nakasone, Ronald Y. ed., *Okinawan Diaspora*. Honolulu: University of Hawai'i Press: 71-89.
- Mori, Koichi, 2003, "Identity Transformations among Okinawans and Their Descendants in Brazil", In Lesser, Jeffrey ed., *Searching for Home Abroad: Japanese Brazilians and Transnationalism*, Durham and London: Duke University Press: 47-65.
- Ohno (Ono), Shun, 2005, *Shifting Nikkeijin Identities and Citizenships: Life Histories of Invisible People of Japanese Descent in the Philippines*, unpublished PhD thesis, Canberra: The Australian National University.
- Penas, Roberto P., 2002, *An Intergenerational Study of the Prewar Japanese Community in Baguio and La Trinidad: 1903-1941*, unpublished MA thesis, Quezon City: Atenao de Manila

University.

The Philippines, Commission of the Census, 1940-41, *Census of the Philippines 1939*, I-II, Manila: Bureau of Printing.

Quiason, Serafin D., 1958, "The Japanese Colony in Davao, 1904-1941", *Philippine Social Sciences and Humanities Review*, XXIII (2-4): 215-230.

Saniel, Joseph M., 1966, "The Japanese Minority in the Philippines Before Pearl Harbor: Social Organization in Davao", *Asian Studies* IV (1): 103-126.

Yu-Jose, Lydia N., 1996, "World War II and the Japanese in the Prewar Philippines", *Journal of Southeast Asian Studies*, 27 (1): 64-81.

Yu-Jose, Lydia N., 1997, "Japanese OCWs to the Philippines, 1903-1917", *Philippine Studies*, 45/first quarter: 108-123.

Yu-Jose, Lydia N., 1999, *Japan Views the Philippines, 1900-1944*, rev. edn., Quezon City: Ateneo de Manila University Press.

[コレクションと公文書]

H. Otley Beyer Collection (National Library of Australia, Canberra)

1919a *Ethnography of the Pagan Peoples of Mindanao, vol. VI, The Bagobo-Japanese Land Troubles in Davao Province (Part I)*.

1919b *Ethnography of the Pagan Peoples of Mindanao, vol. VI, The Bagobo-Japanese Land Troubles in Davao Province (Part II)*.

Jose P. Laurel Papers, 1918-1959 (Institute of Southeast Asian Studies Library, Singapore). Series 6, reel no.1, "Davao Land Cases etc."

(おおの しゅん・帝塚山学院大学国際理解研究所研究員,
ミンダナオ国際大学客員教授・東アジア・東南アジア学)

Rethinking Okinawan Diasporas in 'Davaokuo' with Special Reference to Their Relations with Mainland Japanese and Filipino Residents of Davao, the Philippines

Shun OHNO

Tezukayama Gakuin University

(East Asian and Southeast Asian Studies)

A large number of Okinawans emigrated abroad in order to escape from poverty before World War II. One of their favorite destinations was Davao on the island of Mindanao, the Philippines. Davao was a center of global abaca (Manila hemp) industry, and attracted many Okinawans since Kōzō Ohshiro, an influential Okinawan pioneer, actively invited workers from his prefecture to Davao.

Generally Okinawan migrants had less capital but stronger transnational human network

based on blood relations such as *Monchū* (Okinawan patrilineal kin group), common ties to the same village and shared identity as Uchinanchu. Most of them worked as laborers in the abaca plantation managed by their Okinawan relatives or fellows, and belonged to 'the middle classes' positioned between plantation owners and Filipino laborers. Okinawan migrants, who constituted half of the 20,000-strong Japanese populace in prewar Davao, can be described as "labour diasporas" in Robin Cohen's classification of global diasporas.

The Okinawans were distinguishable from mainland Japanese due to somewhat different appearance and culture. Thus, they were called "*Otro Hapon*" (the other Japanese) by Davao's natives. The Okinawans were more in-marriage oriented than the mainland Japanese, and thus had a tendency to avoid intermarriage with Filipinos. The latter also tended to have a biased view of the Okinawans.

Unlike Okinawan migrants in Brazil, the South Sea Island and other settlements, Okinawan settlers of Davao were not so discriminated by mainland Japanese because of the presence of a substantial number of successful and influential Okinawans. Nevertheless, mainland Japanese settlers tended to regard Okinawan settlers as 'second-class Japanese' primarily for the reason of the latter's economic status that was presumed to be lower than the former. These two kinds of Japanese avoided inter-subethnic marriage because of their ethnic division and mutual prejudice although they struggled together against the Philippine government's attempt to reduce the scale of "Davaokuo", a term coined to resemble Manchukuo.

The Japanese military occupation of the Philippines brought a series of misfortunes to Okinawans, especially abaca cultivators. They were ordered to change their farm products from abaca to rice and vegetables supplied for their forces. Most men were conscripted as Imperial Japan's soldiers or paramilitary personnel although no small number of them had emigrated from Okinawa to Davao in order to evade military service. As a consequence, they became enemies for the majority of the Filipinos whose lives were badly deteriorated under the Japanese military rule. Okinawan migrants had to undo many years of their hard work in the settlement of Davao that was once their 'paradise'. At the final stage of "Davaokuo", numerous Okinawan and mainland Japanese evacuees died of hunger, disease, and other reasons such as their 'fellow soldiers' killings for their own survival.

After the end of the war, all Japanese migrants were ordered to repatriate to Japan by the Allied Powers. Okinawan repatriates were classified as non-Japanese "Ryukyuan refugees". Their ethnic label was suddenly changed probably for the benefit of the US postwar military strategy. Davao's Okinawan diasporas were at the mercy of their fate between Japan and the US, and between 'Japanese' and 'non-Japanese'.

Key Words: Okinawan transnational network, Plural Society, *Otro Hapon*, In-marriage orientation, Non-Japanese Ryukyuan refugees